

がい ぶ
艾 蕪 覚 え 書 Ⅱ

中 田 喜 勝

A Note on “Ai Wu” (Ⅱ)

Yoshikatsu NAKATA

ま え が き

中国作家協会四川分会勤務の王沙(24歳)という艾蕪の娘さんから2月10日付の第二信を2月23日に受け取った。その中に艾蕪について次のように書いてあった。

父は今月12日、雲南へ行きます。昔、歩いたことのある道に沿って、あちこち看ようと思っているのです。「南行記続篇」をまた書こうと考えているのかも知れません。帰って来たら、全国文联委員拡大会議に参加のため北京へすぐ赴きますが、幸いにも父は近来、体の方もまだ丈夫です。そうでなければ、父があんな遠いところへ行くのが私たちはとても心配なのです。

父親本月12号将去雲南，他想沿着過去他走過的路到处看看，可能還想写南行記続篇。回来后，即赴北京参加全国文联委員拡大会議，幸好他近来身体還不錯，不然，我們真不放心他跑那麼遠的地方。

去年4月15日、長崎のグランドホテルで、偶然お逢いした時も、76歳とは見えないほどお元気があった。今度で三回目、今なお、あの雲南の深い連山に踏み入る体力や気力をお持ちだと知り、非常に感動している。

本文は艾蕪の「南行記」の序と魯迅の「呐喊」の自序との内容の中に類似点があることに注目して、両者の比較を試みた。併せて、艾蕪の「出世作」と云われる「人生哲学的一課」を訳出して参考に供したいと思う。この短篇小説は艾蕪の文学を考える場合、必読すべき作品である。

この小説によって艾蕪はその存在を認められた。「艾蕪文学」の礎石とも言い得る作品である。以後、艾蕪は素朴・明快、時には詩的な筆致で、下層社会の人々を終始一貫して描き続けている。中国の現代作家の中では、沙汀と共に特異な作風を持った作家と言えるであろう。

① 艾蕪創作開始の経緯

「南行記」(人民文学出版社・1980北京)の原《南行記》序及び「中国當代文学研究資料艾蕪專輯」(四川大学中文系編1979・8)の「私はどのようにして小説を書き始めたのか。(すなわち「南行記」の序)」と題する一文の中で、艾蕪先生は次のように述べておられる。

漂泊の旅の途上で頑張っていた時や、昆明の赤十字社で雑役夫をしていた時や、ビルマのカチン族のいる山の「茅草地」で馬糞の掃除をしていた時など、いずれも暇を偷んではなにかのものを書いたことがあった。しかし、それは自分の誤楽が目的だったので、失くしたり散らばってしまったりして、全然残っていないのである。

ある時期の日常生活の一部として、まともに執筆したものが今でも一二篇残ってはいるが、それはラングーン以後のことである。

ラングーンに始めて着いた時には、知合いも銭も無く、その上、罹病していたので、Maung Khine Street (現地の華僑は五十呎路と呼んでいた。)の騰越旅館(商業兼業)に宿泊していたが、主人から自然とひどく嫌われた——私を^{おもて}追出したがっていた。それでも別に表には出さなかった。多分それは同国人だという想いからであったのだろう。

ある日、私をベッドから突然、引きずり出して、印度人の車夫にラングーンのグランド病院へ送り届けさせた。そこは治療のため入院ができ、しかも無料ということであった。その時、私の全財産——ボロの書物と古着とを一包みによく包んで、私に持って行かせた。急に好転したその振舞いに私は非常に感激し、人力車に乗る時には、なんと眼には感謝の涙までためていたのであった。しかし、病院に到着すると、ある印度人の医師がいい加減に診察したきりで、しかも入院は許可しなかった。それでずっと呻きながら引返すより仕方がなかった。しかし、気心の良いこの印度人の車夫が私を扶けて旅館の門口に入った時には、主人は腹を突き出しながら出て来て、入口に立塞がり険しい顔で言った。

「泊れないんだ、ここは。」

彼はまた肉付きのよい拳を振りあげ、強いて這入って行けば、殴りかからんばかりであった。

そのようにして、私はさっさと追払われてしまったのだ。

私は店の門前の通りで、私の小さな包みに空しく体を寄りかけて、静かに目を閉じた。

その時、心中には悲哀も憤怒も無く、何の「未練」も無かった。この浮雲のような生命は浮雲らしく散らそうと、ただそう思っただけであった。

この様子は周囲の人に悲しみや憫みをおそらく感じさせたのだろうか。同宿の或る雲南人（彼の姓名を忘れてしまったのは非常に恥ずかしいことだ。）は「ラングーン通」であったので、私のために同省の同郷人がいないかと思案してくれた。長いことかかって、やっと半人前の人を思い出してくれた。というのは、その人は国籍は同省だが、安徽省で成長していたからである。しかもその半同郷の人は言わばやはり「久しいこと世間の事に係り合わない出家の身」であった。その雲南人はそんな病気になってしまった私を見て、そういう境地に立たされると、出家か否かお構いなしに、すぐに黄包車の車夫にそこへ引張って行かせた。当然、その雲南人はそうすれば他人を不愉快にさせるものだとよく知っていたので、出家の門前に着くと、私の感謝の言葉をしっかり聴き取りもしないで、車夫と一緒にそそくさと立去ってしまった。

どうしようか。最後には私は頭がぼーっとなって、ぶっ倒れるようにして自力で中に入った。その時は、ただもう病む身を安全に置いて、風にも当らぬ場所を本能的に渴望していたからである。

誰が物好きで見知らぬ人を引受けて、泊めさせるであろうか。ましてやこの見知らぬ人が罹病しているのに。当然のことだが、それには苦し気に哀れ気に頼みこまなければならないのである。ところが、その出家は慈悲深いお方で、私を住み込むようにしてくださったのだ。

この方は私が生涯、感銘している人であり、その後、遂に私の教師となった出家——万慧法師（謝無量の三番目の第一筆者注：清末民初の文学者で、名書家。「中国婦女文学史」の著あり。）は私を住込ませた後もよく面倒をみてくださった。そして、私は病気が治癒すると、その方のために買物や炊事や掃除などの家事に励んだ。しかし、その方はサンスクリットの学者で、寺には住まず、独りで書物を教える清貧な生活をお過ごしだったので、当時は下僕一人も養うことができなかつたし、一方、私は労力を売る場所をおいそれとは捜し出すことができなかつた。

った。当然のことながら、前々から苦しかった暮らしは今や日毎に行きづまらざるを得なくなってしまった。

恐らく、私が暇な時に好んで書きものをしているのを見られたからであろう、その方は現地の華僑新聞に何か書いて稿料を得ることはできないのかと尋ねられた。というのも、編集部にその方の友人が多くいたので、身分不相応なつまらぬことを別に書かなければ、当然、どしどし採用してくれるはずだったからである。逼迫した生活に「抵抗」するために、私は無理に小説を一篇書いて「ラングーン日報」に投稿した。編輯の陳蘭星君が掲載前に作者がこのような私であることを聞いて、早速、彼のポケットマネーから二十ルピーを出してくれた。それで、以後、私は労力を小売りする以外に脳力を販売する生活が始まったのである。

しかし、当時、私は文芸に対して認識不足であって、問題にするに足らないと思ひこみ、何も苦心までして研究しなくなかったのである。

文芸を重視するようになったことについて言えば、映画と接触してから後のことである。ある時、ラングーンの Sule Pagoda Road (現地の華僑は白塔路と呼んでいた。) の Globe 劇場でハリウッドの映画を観た。記憶では筋は大体次のようであった。新聞記者があるダンサーを愛していたが、アメリカで惨めな波瀾曲折を経験し、まだ恋は実のついでなかった。そのダンサーが芸で稼ぎに中国に来たが、新聞記者はその消息を聞いてはるばる後を追って来た。丁度、辛亥革命の時期に当たっていて、まさに中国の大動乱の年であった。この一組みの恋人たちは今にも共に恋心のせつなさを互に語り合おうとしていた時に、突然、浮世から失踪して真暗い監獄の中に閉ぢこめられてしまった。だが好都合なことに、二人の居る牢屋は壁一枚隔てているだけで、互いに話声が聞かれ、しかもそれぞれの部屋の穴から二人が手を伸ばすと、熱っぽく烈しく握り合うことができた。しかし、二人をいつも苦しめ悲しませるのは手がもう共に握り合っているのに、顔と顔とを一目さえも見合せるのができないことであった。犯罪事実についてはダンサーのを述べてみると、彼女は清朝の高官の邸で芸を売っていたが、たまたま現地の民軍が事を起こし、その高官を「後花園」で殺害した。ダンサーはその惨劇に偶然、遭遇して気絶せんばかりであった。当時、清朝と民軍とが和議をするという消息が恐らく伝わって来たらしくて、民軍の首領はこの機会に乗じて、清朝高官殺害の罪名をダンサーの身の上にあっさり転嫁し、死刑という酷刑を科そうとしていた。

ダンサーが引出され首を刎ねられようとしていた丁度その日に、新聞記者は

看守を買収したらしくて、監獄を逃亡し、電報局に飛んで行き、アメリカへ救助を求める至急電を打った。すると、太平洋上のアメリカの軍艦が風に乗りに、波を蹴って急遽、中国に向かって馳せ参じて、その上、爆弾を搭載した飛行機を飛ばせ、救助を求めている場所へ行かせた。裂けた服の上から縛られたダンサーが断頭台に跪き、黒山の人々を前にして、二名の屠殺屋の大男から首を刎られようとしていた丁度その時に、アメリカの飛行機が飛来して、ドカンと一発爆弾を投下した。そこで劇場の観衆全員のヨーロッパ人・ビルマ人・印度人そして中国人、それに日頃からアメリカ帝国主義に「歯ぎしり」していた私までもが一斉にパチパチと大きな拍手をした。そしてアメリカ帝国主義が「支那民族」の「卑劣さ」と「野蛮さ」とを“Telling The World”（この映画の題名）という勲功をもここに見事に立てたのであった。なぜなら私は信じているが、世界で中華民族を理解していない人々はこのような一つの暗示を受けると、帝国主義が「支那」で爆撃したという「英雄的行動」がきつとますます讚美されるものになってしまうのだから。

だがしかし、この一件から文芸は決して日常茶飯事の気晴らしではないことがはっきりと分かったのである。しかし、一生の精力をすべてまたは一部をその文芸に注ぐというようにはまだ考えたことはなかったようだ。

その後、追放されて帰国した。ある日、上海の北四川路を独り歩いていると、数年来、消息の無かった親友沙汀とばったり出逢った。当時、彼は筆を動かし創作をすることはまだしてなかったが、もう長い間、文芸を自分で苦心し修行していたので、私のかくも多く珍らしい経験を聞き、その上、昔よく知っていた私の性情をも考えて、どうあろうとも彼のように文芸に力を入れるようにと私に勧めた。それどころか、当時、窮迫していた私を彼の家に連れて行って住ませ、私に毎日安心して何の危懼もなく研究に従事させ、著作させてくれた。また研究・著作の上でも十分な指導を熱心にしてくれた。憶えているが、そのような日の夜、私がもう倦いて心をほかの方へ向けていると、彼はいっそう熱心に話を始め、手を伸ばして私の膝頭を揺り動かすので、私は精神を集中させ、また議論をしたものだ。私自身といえば、感動して努力せざるを得なかったのである。私が身で経験し、目で見、耳で聞いたこと——すべての力弱い者が圧迫されいぢめられている悲劇をすべて切実に書いてやり、アメリカ帝国主義の芸術家たちと同じように、“Telling The World”ということをしてやろうと当時決心したのである。なおビルマのラングーンの華僑新聞「ラングーン日報」で植字工をしていた親友の黄綽卿がいて、断えず、職工の友人たちへのカンパで

私を助けてくれ、私の生活を保障し、糊口のために筆を投げ出すことのないようにしてくれた。

この処女作は芸術上では、そう言えないものかも知れない。しかし、私の決心と努力とはやはり芽萌え始めていたといえるのである。それにしても、この若々しくて弱々しい芽はもし友人たちが傍で灌漑してくれなかったら、この荒漠とした地中から芽の先端を出すことは絶対になかったはずだし、私自身今ごろ世界のどこかにうらぶれていたかも知れないのだ。

1933年11月1日，上海。

2 魯迅執筆開始の背景

「朝花夕拾」(人民文学出版社・1974北京)に収められた「藤野先生」と題する一文の中で、魯迅先生は次のように述べておられる。

第二年添教霉菌学，細菌の形状は全用電影来顯示的，一段落已完而還沒有下課的時候，便影幾片時事的片子，自然都是日本戰勝俄國的情形。但偏有中国人夾在裏邊；給俄国人做偵探，被日本軍捕獲，要槍斃了，围着看的也是一群中国人；在講堂的還有一個我。“万歳！”他們都拍掌歡呼起来。

這種歡呼，是每一片都有的，但在我，這一声却特別聽得刺耳。此后回到中国来，我看見那些閑看槍斃犯人的人們，他們也何嘗不酒醉似的喝采，——嗚呼，無法可想！但在那時那地，我的意見都變化了。

上文には日本の漢字に改めたものもあるが、訳出してみると次のようになる。

第二学年では細菌学を加えて教えた。細菌の形状が全部映画で顯示されたのである。一段落しても講義時間がまだ終ってなかったので、時事関係の映画をいくつか見せたが自然、それらはみな日本がロシアに戦勝した情形であった。しかし、その中に中国人のまでが含まれていた。ロシア人のために密偵となり、日本軍の捕虜となって、銃殺されようとしていたが、周囲で看着る者も一群の中国人であった。講堂の中に居た者に、なお一人の私が居たのである。

「万歳！」彼らはみな拍手し、歡呼した。

このような歡呼はどの画面にもあったのである。しかし、私にとっては、この声は特に耳を刺すように聞えた。その後、中国に帰国して、私は銃殺される犯人をのんびり見物している人たちを見たが、彼らもなんとみんなが酒に酔ったように喝采をしなかつただろうか。喝采していたのだ。——嗚呼、いくら考

えてもしようのないことだ！ その時、その場所によって私の意見は変化したのである。

上記の出来事について「呐喊」（人民文学出版社・1973北京）の自序の中で、魯迅は更に詳しく述べている。原文まで挙げると長くなるので、筆者の訳文のみを次に示す。

私はまだ記憶しているが、前の医者 of 議論や処方を含、私が知り得たものと比較すると、漢方医は意識的あるいは無意識的な一種の詐偽師に過ぎないことが次第に分かって来た。同時にまた騙された病人やその家族へ非常に同情した。しかも、歴史を翻訳することを通じて、日本の維新は大半が西洋医学に端を発していることを知ったのである。

このような幼稚な知識のせいで、その後、私の学籍が日本のある田舎の医学専門学校に置かれることになったのである。私の夢はとても美しく満たされたもので、卒業して帰って来たら、私の父のように誤診された病人の病苦を救って治療してやり、戦争の際には軍医となって行き、他方、また国の人々へ維新への信仰を高めようと考えていた。私は以前、微生物学を教授する方法を知らなかったが、今やなんとか進歩していた。要するに当時は微生物の形状を映画を用いて顕示したものであった。それで、ある時、講義が一段落しても時間にまだなっていなかったので、教官はたっぷり余った時間を埋めるために、風景や時事関係の画面を学生に見せてくれた。当時は正に日露戦争の時代に当たっていたので、戦争関係の画面が自然、比較的が多かった。私は講堂の中に居て、同級生たちの拍手と喝采にしばしば追従して喜ばねばならなかった。ある時、遂に私は画面の上で、久しく無沙汰していた多くの中国人と突然会見したのであった。一人が中に縛られ、左右に多くの者が立っていたが、一様に強壮な体格であったが、明らかに無感覚な表情をしていた。解説によると、縛られているのはロシアのために軍事スパイとなった者で、今にも日本軍に首を斬られて晒らしものにされようとしていた。そして、取巻いているのもこの晒し首の盛挙を鑑賞しに来た人々であった。

その一学年を修了しないで、私はすでに東京に行ってしまったのである。なぜならあのことがあってから、私は医学が別に緊要なことではなく、全く愚弱な国民はかりに体格がいかに健全で、逞ましくても、全く無意味な晒し首の材料や観客にもなり得るだけであり、どれだけ病死するかは必ずしも不幸とは

思われないものだとそう感じたのだ。従って、私たちが第一に着手すべき大切なことは彼らの精神を変え改めることであり、そして精神を変え改めるのによいのは、私は当時は当然文芸を推進すべきだと思いこんだのである。そこで文芸運動を提唱しようと考えたのであった。

一九二二年十二月三日 魯迅于北京。

③ 両者の比較

魯迅と艾蕪とが文芸の道へ力強く一步踏み出そうとしていた初期のそれぞれの段階で、両者に類似点があるのは興味深いことである。

魯迅は「愚弱」な中国人の精神を変え改めるには文芸を推進することだと感じ、一方、艾蕪は文芸は決して日常茶飯事な気晴らしではないと思った。いずれの場合でも、映画をその媒体としているのである。もっとも、魯迅の仙台医専のは幻燈であったかも知れない。しかし、いずれにしても、画面に映出された場面を観て、両者ともに文芸に対してそれぞれの意見を持ち始めたことは事実であろう。

魯迅(1881~1936)が問題の画面を観たのは、その「呐喊」の自序に「日露戦争の時期であった」とあるから1904年または1905年である。写真集の「魯迅」(文物出版社・1976・北京)所収の写真の中に、1904年(明治37)8月と注記された入学式の記念写真が在るから、その年の9月に第一学年生となったことが分かる。また「朝花夕拾」所収の「藤野先生」と題する一文の中に、「第二学年に細菌学が加わった。」とあるから、問題の画面を観たのは1905年の9月以降ということになる。更にまた「呐喊」の自序の中に、「この学年を修了しないで、私はすでに東京へ行ってしまった。」とあるから、1906年9月以前に仙台を去っていたことが分かる。従って、観た時期は1905年9月から1906年8月までの間となる。1906年には日露戦争はすでに終っていたから結局、1905年9月から同年12月までの期間に魯迅は問題の画面を観たことになる。魯迅24歳の時であった。つまり、文芸の意義について目覚めたのが24歳の時であったということになる。翌年7月、母の命で一時帰国して結婚したが当時はまだ独身であった。

24歳、独身の魯迅が日本の東北、仙台の地で、文芸に目覚め始めたということは、日中両国の民間交渉史上、誠に意義深い。

しかし、假りに魯迅の父が漢方医のために死期を早めなかったとしたら、換言すれば、当時、中国にすでに西洋医学が発達していたとすれば、そしてまた日清戦役というものが無かったとすれば、恐らく魯迅は日本には留学していな

かったであろう。従って、魯迅が西洋医学を学ぶために遥か仙台まで赴き、後に東京で文芸へ方向転換したということ、大きな観点から見ると、阿片戦争以来、半植民地化されてしまった中国の後進性なるものが時代的背景として厳存していたことを看過できないのである。

一方、艾蕪（1904～）が問題の映画を観たのは、その「南行記」の序に「ラングーンの Sule Pagoda Road の Globe 劇場でハリウッドの映画を観た。」とあるから、場所はラングーンであったことが分かる。艾蕪の年譜（長大教養部記要・人文科学篇1980・第21巻第1号所収）によると彼がビルマに居住したのは1927年（昭2）から1931年春までであるから、この期間に観たことになる。彼が23歳から26歳までの時期である。勿論、当時はまだ独身であった。

魯迅と年齢的には大差のない時期に、艾蕪がビルマの首都ラングーンで、アメリカの映画を観て、文芸の効用を認識したことはそれなりに意義がある。

しかし、仮りに艾蕪の父が小学校の教師でなく、家計が艾蕪を大学へ進学させるほどに豊かであったとすれば、換言すれば、中国の農村に大地主・商人・高利貸（大地主・商人が兼ねる）・軍閥及び悪徳役人の搾取が存在せず、そしてまた所謂「五四運動」という啓蒙運動が展開されていなかったとすれば、恐らく艾蕪も雲南の昆明を経て遥かビルマのラングーンまでは行かなかったであろう。従って、艾蕪がラングーンで文芸の効用を認識したということは、やはり魯迅の場合と同様に中国の後進性（親の婚姻取決めも含む）なるものが時代的背景として存在していたことを看過できないのである。

個人の行動がその家族・民族・国家及び時代と程度の差こそあれ無縁ではあり得ないことは当然というべきである。

上述したことから要点を抜き出し、表にまとめると、両者が文芸へ関心を持つに至ったのは：

	時	処	年齢	境遇	背景
魯迅	1905年(明38)	仙 台	24歳	学 生	中国の後進性
艾蕪	1927年(昭2)	ラングーン	23歳	流浪人	〃
	1930年(昭5)		26歳		

両者が文芸の意義乃至効用について開眼したことは映画を観たという類似した事実を通じてであるが、爾後の両者の行動にはいささか差異が見られる。

魯迅は東京に出て早速、失敗はしたものの雑誌「新生」の発行を計画したり、「域外小説集」を第二冊まで発行したりして、積極的な実践活動に入っている。一方、艾蕪はその後1931年、上海の北四川路で偶然、親友の沙汀と出逢い、彼の勧誘助言によって、文芸の道へ進む決心をしている。そして、「小説の題材」に関して沙汀と連名の書簡を魯迅へ送り、その指導をも請うている。従って、ラングーンで“Telling The Word”という映画を観たことよりも、沙汀に出逢ったことの方が艾蕪の文芸志向により大きな影響を与えていると考えられる。

艾蕪自身もラングーン時代を回顧して、「だが、一生の精力を全部或は一部を文芸に注ぐということはまだそのように考えたことはなかった。」(本文所収)と云い、また上海時代を回顧して、次のようにも云っている。「上海に帰りついて、北四川路の路上で偶然、私の文学研究の友人に出逢った。師範学校時代の同じクラスの同学の沙汀であった。彼は私のそのような経歴を知って、また書きたくなり、私を彼の家へ引張って行って住ませ、朝夕一緒に研究した。それから、やっと文学というこの道を歩く決心をしたのであった。しかし、この決心も動揺があったのである。原因はしばしば投稿が壁にぶつかったからである。その後、「文学月報」に私の「人生哲学的一課」が発表された時に、初めて決意が堅く固まって行ったのである。」(『四川文学』四川人民出版社・1980・1 P69～P71)

しかるに、艾蕪が「南行記」の序の中で、あのアメリカ映画について詳細に過ぎると思われる程に言及しているのはなぜであろうか。このような疑問を懐いたのは、それらの内容が類似しているからである。つまり艾蕪が「呐喊」の自序または「朝花夕拾」の「藤野先生」の記事を念頭に置いて「南行記」の序を書いたのではないかという疑問である。その可能性の有無について考えてみたい。

先ず「呐喊」自序の末尾に「一九二二年十二月三日 魯迅記于北京。」とある。だから「呐喊」が出版されたのは1922年(大11)の年末から1923年(大12)にかけてであることが分かる。1922年(大11)には、艾蕪は成都の省立第一師範学校の第二学年に在学中で、年齢は18歳か19歳の時であった。艾蕪はその時期を回想して次のように云う。「成都の第一師範学校で勉強していた時は、丁度、五四運動後で翻訳された小説や創作された小説が多かった。そこで、物語りを好んで読む気持ちがまた蘇った。最初に興味深く感じたのは「新潮」に孫伏園が訳したトルストイの「コーカサスの捕虜」であったと記憶している。その次は「小説月報」に夏丐尊が訳した国木田独歩の書いた「女難」であった。その外は林

琴南が訳したデッケンズの「賊史」であった。（「四川文学」1980・1月号69頁）

艾蕪は上海へ出た以後は、魯迅に傾倒していたから、成都で「呐喊」をすでに読んでおれば、当然その書名を挙げているはずである。しかし、1934年ごろ書かれた上記の回想の中にはそれを挙げていないので、成都時代にはまだ読んでいなかったと考えられる。

次に「朝花夕拾」について見てみると、その小引の末尾に「一九二七年五月一日、魯迅于廣州白雲樓記」とある。だから「朝花夕拾」が出版されたのは1927年～1928年の頃であったことが分かる。この時期には、艾蕪は雲南山中を経てピルマのパモーに出、更にラングーンへ出ていた。そして生活と闘っていたのである。やはり「朝花夕拾」所収の「藤野先生」の一文はまだこれを読んでいなかったと考えられる。

要するに艾蕪は「呐喊」や「朝花夕拾」を1931年秋に上海に出て来る以前は、読んではいなかったものと考えられる。しかし、ラングーン時代には「華僑日報社」に出入していたので、魯迅という人物の存在は知っていたかも知れない。

ところで、艾蕪が上海到着以後、魯迅へ沙汀と連名で書簡を出したことはすでに触れた。この外にも、「狂人日記」と艾蕪との関係について一つの資料がある。それは、「艾蕪の生活の道、創作の道及び芸術の風格」と題する風沙という人の一文である。この一文は「中国当代文学研究資料艾蕪專輯」（四川大学中文系編・1979・8）に収められているが、風沙は上海時代の艾蕪を次のように回想している。

当時はまさに皆が声を大にして世界の文学遺産を受け入れていた時であり、上海という土地はまた全国の文化の中心であったから、あなたは精神という広い海洋の中にすぐに沈んで行った。あなたを最初に引きつけたのは「小説月報」に連載された「狂人日記」であり、あなたはその各篇を剪りとって一冊にまとめ、毎朝、洗面所でそれを朗読し、後に何度も読んでついには暗誦できるようになった。と。

「狂人日記」の篇幅からして、それが連載に適するものか、また「狂人日記」は1918年4月「新青年」にすでに発表されているのに、更にまた1931年以降の「小説月報」にも連載されたのかというような疑問は残る。しかし、いずれにしても、艾蕪が魯迅の人と為りと作品とに大いに関心を懷いたことは事実であろう。逆に魯迅も監獄に収監された艾蕪を救出するために、その裁判の弁護料五十円を支出している程である。従って、艾蕪が上海時代に「呐喊」を読んだ

に違いないということは否定できないであろう。もっとも、「呐喊」の自序を読んだ上で、自分の「南行記」の序を書く際の参考にしたというようなことを艾蕪自身が言っているわけではない。しかし、恐らく、艾蕪の心中には「呐喊」の自序が意識されていたのであろうと考えられる。

結局、この問題は明確な解答を得ることはできなかった。しかし、次のようなことは言えると思う。すなわち、魯迅も艾蕪も両者ともに映画の画面を通じて、文芸の意義について開眼したという共通点を持っているということだ。そして映象の背後に潜在している「中国の後進性」という背景を的確に把握し直感していたのである。魯迅は主として封建思想の打破のために、艾蕪は主として下層社会の人々を描くために、深い愛情と同情とをもって筆を執ったのであった。

艾蕪が魯迅の「呐喊」の自序を意識して、「南行記」の序を書いたのかどうか。この問題に関しては、艾蕪自身へ直接照会してみるのが最も良い方法である。照会の書信に対して、その回答ではなくて艾蕪の娘の王沙から、目下、父は朝鮮へ旅行中だから、帰って来たら返事をしてもらうとの返信が一応あった。6月中旬ごろには帰宅する予定だとも付言してあった。雲南から帰り、また朝鮮へ旅立っていたのである。

その後、彼女から6月1日付の書信を6月10日にまた受取った。その中に、父の艾蕪について次のように書いてあった。

.....

先生が父について文章をまたお書きになると知り、大変、嬉しく存じます。今、国内で父を研究する人が次第に多くなって来ています。「艾蕪評伝」という専著をすでにお書きになった方がいて、出版社が出版することになっています。「人柄」の面から、父の紹介文を書きたがっている人もいます。国内の文学界では父の「人と為り」は周知のことです。皆さんは父をととても尊敬しています。しかし、父は人に対しては何時も謙虚、温和、愉快で、仇を根にもつことはありませんでした。「文革」中に家に来て財産を没収したり、後にまた父をやっつけた人たちに父は今でも相変わらず親身に応待しています。特権を行使しないというこの点で、父は人々から広く賞讃されています。そして父の仕事への熱意と奮闘精神とは私たち若者が学ぶ価値があります。今、多くの出版物が“どのようにして文学の道を歩いたか”というこのテーマについて父に頼んで文を撰ばせ、文学に志のある若者が刻苦学習するように激励しています。

目下、私は中外の文学作品を多く読んで、自分の文学の教養を積む外に、余暇の時間は大部分を、相変らず、日本語の自習に向けています。文化大革命は私たちに十年の時間を足踏みさせてしまいました。五年の学校生活は三年間、政治運動と不安動揺の中で過ごしたのです。どんなことも学んでいません。今、私は自分の知識が少ないことを痛感しています。しかし、私には全くあのように嘆息し、失望し、ぶらぶらしているような国内の一部の若者の真似はできません。そんなふうでは、ただ人々に生命の空しさ、気だるさ、枯渇を感じさせるだけです。私は父を私の生活や仕事の手本として、父のような人間になり、父のような道を歩きます。……………

……………知道您又将写一篇关于父亲的文章，很高兴！目前国内研究父亲的人逐渐多起来。有的已写出专著《艾蕪評伝》，出版社将出版。有的想从父亲的人品这方面写文章介绍。在国内文学界，父亲的为人是众所周知的。大家很敬重他，而他对他人也总是谦虚、和蔼、可亲，从不记仇。“文革”中到家里抄过家，后来又整过他的人，他现在仍然亲切地对待他们。他不搞特权，这一点上获得了人们普遍的赞扬。而父亲对事业的热爱和勤奋的精神很值得我们年青人学习。现在有许多刊物请他就自己怎样走上文学道路这一问题撰文，鼓励有志于文学的青年人刻苦学习。

目前，我除了大量阅读中外文学作品，培养自己的文学修养，大部分的业余时间仍然是自修日文。文化大革命使我们耽误了十年时间，五年的学校生活，有三年在政治运动和动荡不安中度过的，甚麽东西也没学到，现在深感自己的知识太少，但我不会像国内有些年轻人那样，光是叹息、失望、彷徨，这样只会使人感到生命的空白、疲软、枯萎。我将父亲做为我生活和工作中的榜样，做他那样的人，走他那样的路。……………

彼女からの書信で、娘から見た“父親像”の一斑を知ることができ、改めて艾蕪の“人と為り”を知ることができた。娘が自分の父親のことをこれほどに自信をもって語るのには、そこにながしかの配慮はあるかも知れぬが、それにしても、すばらしいことである。また同時に「文革」の後遺症についても考えさせられるものがあった。

7月3日、艾蕪先生から待望の回答があった。やはり、先生は読んでおられたのであった。その原文は次の通り。

関于写《南行記》序時，是否談過《吶喊》或《朝花夕拾》的《藤野先生》，我是讀過了。

④ 人生哲学の一課

1. 草鞋を売り、進退極まる。

昆明というこの都市はうっすらと黄ばんだ夕陽がたちこめていた。連山に圍繞された盆地に伏し、悲しげに微笑しているかのようであった。

遠い山の峰から下りて来た私は小さな包みを右の小脇に抱えて、淡黄の霧が立ちこめた西へ通じる街の通りに、ぼんやりと立ち止まっていた。

その時はまさしく1925年の秋——残酷な異郷の秋であった。

昨夜、山中の人家で最後の一文の銭を使い果した。しかし、その夜の“ねぐら”はなんとかせひ捜しに行かねばならぬものの、泊ってからの結果がどうなるのか、その時はしばらく予想しなくてもよかったのだ。

店の方で茶を売っている小さな宿屋の中へ、私は悠々と落着き払って入って行った。

包みをカウンターの上に置くと、小賢かしい眼光をちらつかせるボーイが、田舎者を馬鹿にしたような顔をして、私を暗い小部屋に案内した。そこにはベッドが一台置いてあって、その上の汚れた布団には、昼寝をしている人が一人もぐっていた。二寸ほども髪が長く伸びた頭が外にはみ出していた。

ボーイが「オイ」と一声呼んだ。

その白から黄ばみ、さらに黒ずんだ布団が、ムクムクと動き、細頤の黄色い顔が首を出して、布団を持ちあげた。血走り目糞のついた眼をあけ、不機嫌そうにボーイの顔を見て、それからさっと私に視線を移した。

「二人一緒に寝て！」ボーイは手を挙げ、その言い慣れた命令を発して立去った。

私は途方に暮れて、ベッドの傍に腰を下した。

見知らぬ者と一つのベッドで寝るのは、私にとって別に不思議には感じられなかった。

雲南東部の山中を漂泊していた時、私は他人の足の悪臭をかぐことが幾晩もあった。今では慣れて驚かなくなっていた。

部屋の中は初め入って来た時よりも、少し明るくなった。

煙草の煙で黄色く変色した白壁には、泊り客が木炭で書いた下手な字も、明瞭に見えた。

「門を出づれば人未だ家眷を帯びず……」という類の詩句も決して少なくはなかった。しかし、私は一日中食事を摂ってなかったので、実のところ、風流

心を起こして、満腹の人が作ったそんな結構な代物を、のんびりと感心したり、鑑賞したりはできなかった。

私は腹の足しになるものを捜しに行かねばならなかったが、どうして捜したらよいのか全く見当がつかず、ただ本能的に捜しに出ようとしていただけであった。

私は通りを処かまわず歩き廻った。戦線から退って来た兵士のように、少しだるくて痛む足を引きずって歩き廻った。

食堂の鍋に材料が投げこまれる音や、油の煙に乗って通りに流れ出る美味そうな香りに、私は生唾が出、唇を上下に舐めまわした。私の眼はいち早く動かす準備をしていたが、牛肉や豚肉が掛けてある店の方は見向きもしなかった。

その時の私の欲望はそれほど大きなものではなくて、煎餅三枚か乾した「そらまめ」を一掴みも食べれば、それで充分だった。

私は通りに沿って、ゆっくりと歩き、手代たちが小麦粉餅を丁度忙しげに作っている店や、老婆が眠そうに店番をしている軽食露店の方へ老獪な鷹のような眼を注いでいた。喉元から何度も生唾がゴクゴク出て来、一口一口呑みこんだ。

乞食に煎餅一枚を三口で食べ終らせたという昔話が私の脳裏に電光のように閃めいた。

その話というのはこうである。襤褸を着、乞食と呼ばれた男が空腹に耐えかねて、煎餅の露店に跳びこみ、冷えて硬くなったのを二三枚、手掴みにして、パッと逃げ、急いで大口で啖いつき、グッと嚙み下した。店の主人がメリケン粉の「捏ね棒」で打ってやろうと、フーフー言いながら追い駆けた時には、その男は一枚を三口でペロリともう平らげていたというのである。

この昔話は私の心の中に次の二種類の違った響きを伝えた。

一つは嘲って言った。「お前には固くなった煎餅一枚を三口で嚙み下す能力があるか。」

もう一つは悲しげに言った。「無いのだ！」

嘲りにはおまけがついていて、言った。「無いのか。それじゃ、空腹を我慢して生きるんだな。」

食後、支払いの銭が無い男が店の主人から木の長椅子を頭に載せられて引き廻されたことも想い出された。場所は成都だったようだ。昆明では店の主人が無銭飲食の客にどんな仕打をするのか知らないが、考えてみても、きっと安易に見逃がしてはくれないだろう。

腹中で時として咆哮する音が全く私を威嚇していたし、頭の中でもこんな風にしたらと思いついていた。つまり、威風堂々と「八の字型の歩き方」で煙に巻いて、食堂に入り、隅の一番上席を選んで腰を下す。少し鼻にかかった声で、傍に控えていたボーイに厚目の肉入りスープの大碗一杯、乾し牛肉の大皿一枚、胡椒味噌小皿一枚を注文する。……楽しく腹一杯食べる。というようなことを思った。

しかし、食後の重い処罰を思うとやり切れなかった。

売れる品物を捜すより方法がないのだ。物を売るには非常に問題が起こる。包みはカウンターの上にまだ置いてあって、店の主人の面前で取出して売るのはまずいので、夜になってから何とか方法を考えねばならなかった。しかも、売れる物は肌に着けた毛の青シャツの外には、包みの中にズボンがあるが、どれもボロだし、ひどいのはボタンが一二個脱れているものもある。おばあさんから靴底に詰められたり、子どもの「おしめ」にされるのには、十分な資格があったが、他人様を買っていただくなど全くできぬ代物であった。書物は二三冊は持っていたが、角がめくれてとても傷んでいた。当然、古本屋の主人が看ても、要らないと手を横に振る代物である。要するに、私の全所有物は売っても一文にもならないものであった。

歩きながら考えていると、頭が全く混乱して来た。

軒先に挟まれた川のような空が次第に薄暗くなり、都市の大通りがみなキラメク輝きに新しく装いを換えた時、私はやっと宿屋に帰った。

店の主人の家族は丁度、食事中であった。私は慌てて燈火に背を向け、また生唾を嚙みこんだ。

頼んで包みを受取り、小さな部屋に持って行って開けてみた。その夜、私とベッドを共にするはずの細顔の黄色い顔の人はもう外出していた。包みの中からは綺麗で仕上がりのよい草鞋を一足捜し出すことができた。絹の細編みで、全くの新品であった。

私は成都から昆明まで、あの一ヶ月あまりの山道を全く二本の素足で歩いていた。ズックの靴ではすぐに破れて、経済的に割が合わなかった。草鞋は便利ではあったが、足の皮が擦れて赤くなり、歩くといっそう我慢できない痛みがあった。だから、昭通でうまい具合に買いこんだ一足の草鞋が三千華里の道程を私の包みの中に入れられたまま、私と一緒に歩いたのであった。当時は持っても捨て去ってもよい品ではあったが、今や意外にも一つの財産となったのである。四つ辻の通りに競売に持って行こうと思うと、すぐに心が晴れやかに

なった。

草鞋をズボンの内側に入れ、張切って、泥棒にでもなったかのように、店の外へと滑り出た。街燈の光が届かない処で、道の両側に巡查がいないのを見届けて、急いでズボンの内側から草鞋を取出した。いかにも商売人らしい顔付をして、燈火の燦めく通りへ物を手にし、買手を物色しに出かけた。

すぐ考えていた。売るのが一足だけだと見破られず、値段を割引いて損にならないようにするには、どんな口上を言ったらよいのだろうか。

商品は店舗の中にあれば、値段がべら棒に高くても、全く掛値がないのが一般的な原則である。誰彼と買手待ちの売りは新品でも値は半値になるのが普通である。この草鞋が私の手を離れて街頭の競売に出されたら、きっと元手を割ってしまう。また何をか言わんやである。しかし、みすみすそんな場面になってしまうのは承服できない。私は小利口に立廻らねばならない。そんなふりをしてかまわない。必ず生き延びるには、泥棒さえするのだ。餓死が避けられないせっぱ詰った時には。我々を取巻く社会はあちこちで生来の面目をさらけ出す善人を根本的に受け入れてはくれないのだ。真に誠実な善人でも生きられるには、別の新天地が必要なのだ。もしも、私が店に入って行き、店の主人に向かって、今、私はまさに飢えていて、店の勘定など全く考えていないとでもはっきり言おうものなら、それこそ、私はほんとに道端に寝て、巡查の棍棒を喰らってしまうのだ。

この生存の哲理のままに、私は小さな露店の傍に休息していた車夫に声を掛け、草鞋を握った手を差出した。

「一寸、皆さん、草鞋は要らんかね。昭通から持って来たばかりだ。これは見本だ。ほら、要るかね。」

車夫は草鞋を次々に廻らし、小さな露店の臭い石油ランプの下で、さすって看ていた。私は後手に組み、いかにも経験豊かな店の主人らしく、買手たちの顔色を観察していた。

一人が気に入って言った。「いい値だべ。」

一人が鬚の短かい下頤を振りながら言った。「履いてねえだ。」

一人は悠然と自信ありげに言った。「やっぱし、わたらの麻草鞋がよかつべ。」

その商いは全くぶち壊しだったので、私は少々、慌てた。すると、落花生や生のそら豆を売っている露店商人が私の値段を尋ねた。「一足いくらかな。」

「大将、何足買うのかい。」 実際は何百足も売ったことがあるかのようなふりをして尋ねた。「多ければ少しまけてやるが、一足だけなら四百文だ。」 私は

この値段で買っていたので、別に慌てなかった。もう少し高く吹きかけたかったが、このよい客を失なうのが心配だった。

「ホッ、少し足したら、ズック靴が買えるわい。なんでそう高えんだ。」露店商は商いの品を看てないふりをしていたが、店台の上を眼光鋭く視ていて、落花生やそら豆の山の粒をそっと数えているようであった。

私は草鞋を撮みあげ、その男に見せて言った。「ホラ、昭通の草鞋だ。」実は昭道の草鞋が昆明のとどう違うのか、私には少しも分からなかったが、ただもう一人前の商人のふりをして話した。

「昭通からのか何か知らんが、草鞋は草鞋さ。卵が鶏になるようなわけにはいくまいで。」小商人はほんの少し口を歪めて、私をからかい始めた。

どうしたらよいのか分からなくて、私は顔をすぐに赫らめ、プンプンしながら、草鞋を手にして立去ろうとした。

「二百文！売るかい。」彼は私に突然、値段をつけて来た。

「三百五十！」私は振向きざま答え、気が少し楽になった。

「中をとって、二百五十」車夫の一人が仲介した。

「この人の言値なら、いいぞ！」小商人が私を声高に呼んだので、私は立止った。

「三百、それ以上は負けんよ。」私の値段を言い張った。

「持って行け！要らねえ。」

私は一大転回をして立去り、誰彼と客を捜した。車夫・人夫・露店商・ボーイなどであった。まるで蓄音機のように、何回も何回も同じことを口にした。草鞋一抱え、見本一足……多く買えば値引きすると。しかし、結果は実に馬鹿げていて、つけ値は百六十か百八十で、私が草鞋を売って飯にありつくのを彼らはお見通しのようであった。

私は困惑してしまい、落花生やそら豆を売っていたあの露店商に引返して、二百五十の値段で売りに出した。だが、彼は買うとも買わないともつかぬ顔付で、フンフンと私を鼻先であしらった。多分、追いつめられた気持ちのために、私のつけたばかりの仮面は剝がされてしまったのだろう。だから、彼の目前で、私は体裁をつくろわねばならなかった。最後にやっと彼は「ウーム」と一声うなってから、「要らん。この草鞋は履いていない。」と言った。

この言葉は全くこたえた。私は身を転じて駆け出そうとした。

「よし！二百、二百だ！」彼はまたそう言って、私をぐっと摺えた。

この一声は百八十よりも二十文多かったし、その二十文はその時その場所で

の私にとっては、比喩物がないほど貴重であった。そこで、私は彼に売り渡したのである。

暗褐色の銅貨（一枚は二十文）が彼の手から私の掌の上に一枚一枚数えて載せられ、全部で十枚あった。私は注意深く銅貨を石の階段に投げつけて、贖物がないか確かめてみた。そんな仕草は一抱えもの品を売る商人とは全く似ても似つかなかったが、そんなことは気にしておれなかった。

その時、傍にいた車夫が言った。「えっ、一足が二百文、そんならわしも買う。二三足取って来てくれ。」

「売らん、売らんのだ。」私は少し腹が立ったが、そんな気持も間もなく消えてしまった。

まるで銀貨をば十枚もポケットに入れているかのように、私の口許は悦びで震えていた。

私は一軒の煎餅屋に入って行った。左手に銅貨十枚を握りしめ、右手を伸ばし少し太目の煎餅を選んで、値段を尋ねた。メリケン袋を改造した前掛けのボーイが答えた。

「一つ、銅貨一枚！」

私は二十文の銅貨で当然二つ買えるものと思ったのだ。チャリンと一枚を店台に放り、黄色いホカホカの煎餅を二個、手の中に握りしめた。立去ろうとするとボーイが叫んだ。

「もし！もう一枚銅貨が要ります。」

「何？ お前が銅貨一枚で一個といったのは、十文のか二十文のか。」私は不思議に思って尋ねた。

「十文の銅貨など街中どこにもありません。」ボーイの声はもう低目になっていて、私が遠い他国の者だと分かったようであった。

銅貨を更に一枚手放してからは、手持ちの財産は前ほどそんなに楽観的ではなくなった。私は燈火の薄暗い石の階段のところに行って、腰を下し、急いでムシャムシャ私の煎餅を食べた。昆明の初秋の涼しさが、夜の訪れとともに私の鼻先をかすめていた。

最初の煎餅はどんなにして食べたのか分からなかった。二番目のはゆっくりと嚼まねばならなかった。一口嚼むと、中から温かい香りが噴き出て来て、その香りも嗅いだのだった。食べるほどに美味しくくて、食べ終るともっと欲しくなったが、それは駄目だと思った。慳吝な親爺が放蕩息子に忠告するような心情も持合せていたのである。

遂に我慢できずに、後でまた別の店へ行行って、一個買った。全財産は十分の三が消えてしまったが、それでも結局、満腹にはならなかった。しかし、私は元気を取戻したのである。

元気になった私は夜の都市の繁華街の中に入って行き、異郷の新鮮な情緒を味わい、一方では、口許の煎餅屑を舌先を伸ばし、まだ舐めていた。

滇越鉄道というこの大動脈はフランスの血液やイギリスの血液をたえず注射していた。……それはもともと村娘の顔をした山国の都市を綺麗なモダンガールにしてしまったのである。彼女の腹中には異なった胎児を孕んでいた。洋品店から出て来た「肉ダンゴ」のような男は人力車の上の鈴を踏み、タッタラン、タッタランと花崗岩を敷きつめた通りを夜毎に歓楽を求めていた場所へ向って行った。燈火の燦めく酒房やお客で賑わう料亭に向って、飢えた眼光を投げかけている人々には、街角でも露路の入口でも、何処でも出会うことができた。パンを売る黒衣の安南人は「西洋パン」と雲南訛りで叫びながら、寂しげに人の群れの中を歩き、時には目の前に現われたかと思うとすぐに消え去った。

銅貨七枚の財産を懐中にして、通りをぶらつくと、まるで何の不幸もないかのようにであった。

夜更けに帰った。私と一緒に寝るはずの人は悄然とベッドの傍に腰を下して、煙草を吸っていた。その男は私へ柔らかな眼を向け、同時に実に礼儀正しく煙草を一本、私の手許に差出した。私は煙草を渡そうとしている彼の手首に黒点のある紅い斑点が一面にあるのを見て、すぐに恐しくなってしまった。「今夜、疥癬の人と一緒に寝るとは大変だ。」と心の中から飛び出した声であったが、幸い、口許で我慢し、私はやっとの思いでやはり礼儀正しく煙草を遠慮した。彼がたまたま体を搔くと、私の全身の皮膚も急に痒くなった。私は宿屋の主人に会いに行って、別の部屋と交換してもらわざるを得なかった。ところが、主人は私に白い眼を向けて、あっさりと拒絶したのである。

私と寝た連れの男は一晩中、目を覚ましていて、しきりに腿を搔き、背中を搔き、腹を搔き、足の裏その他を搔いた。

私は憎悪し、恐懼し、困憊してしまって、不愉快な初秋の一夜を過ごしたのであった。

2. 人力車挽きにも失敗。

車屋の門口に到着すると、腰をしゃんと伸ばして武骨な感じを出した。要す

るに、車屋の主人の面前では、決して病弱ではないという印象を与えねばならないのだった。その時、私自身も九分通りは大丈夫だ、ズボンを捲き上げて両脚を彼に見せさえすれば、満足して引受けてくれるはずだと思った。学校に居た頃はサッカーが好きであったし、最近二ヶ月、山道を歩いたので、脚は全く健全に発達していたのだ。

「瓜皮帽」をかぶった親方に会って、丁寧な語調で彼に來意を説明してから、すぐにまた急いで尋ねた。

「私のこんな体で車が挽けますか。」

「何で、できんことがあるかね。君はびったりだよ。」彼は鼻詰りの声を出し、咳払いを一つし、ペッと痰を吐いて、「十四五歳の子どもや五十過ぎの老人でも挽いて通りを走っとるよ。」

ところが、私は顔色が冴えてないので、問題が別に起こるのではないかと心配していた。もしも彼が白い眼の流し目で、「お前は駄目だ。」と言うのなら、ズボンを引き上げ、足をはっきり見せて、最後の抗弁の証にしようと私の手は待構えていた。意外にもそんなうまい結果だったので、自然と心中、非常に愉快であった。

「君は街の通りを知っているかね。これは実は……」顔を真赤にし、二三度咳こんで、「大変大事なことなんだ。」

その言葉は私に答えを少し躊躇させるほど確かに大難題であった。「私は……街の通りは……」急に更に元気を出して、「分かっています。」

「ほんとかな。」無理をしているような私の答え方に、やはり、彼は疑ったのである。

「街の通りが分からんで、車が挽けますか。」飢えの脅威が私をぐっと勇敢にさせたのであった。

「そうだ。そんなら好いのだ！」彼は会計簿のような大型の帳簿を取出した。筆を執り、私が告げた姓名、年齢、本籍を全部書きとめた。そしてすぐ狡猾そうに眼をキラリと光らせたが、極く鄭重に言った。

「車の借代は一日一円になっています。」彼はプーと鼻水をかんだ。指先二本に粘りついたぬるりとした奴を腰掛けている椅子の底にゆっくりとなすりつけ、「それは心配要りません。二つ三つ通りを多く駆ければ、そんな金ぐらい返せせます。それにもう一つ、客が車代をくれたら、多少に拘らず、手を差出して『丹那、もう少しはずんで。』と言うんです。いいですか、それこそ稼ぎのコツなんです。」

「車の借代は少し負けられませんか。」 一日一円というこの貸借料は私を確かに驚かせた。

「それは決まっている規則なんでね。君が挽きたくないなら、それでもいいんだよ。」

「いいです。挽きます。挽きます。」 切羽詰った生命を引延すには、目先の脅しやひどい仕打ちも、しばらく全く気にならなかった。

「えー、誰が君を保証するのかね。どの店かね。」 彼は勝ち誇って、得意げに尋ねた。

「エッ、私には保証してくれる店なんてありません。」 私は少々驚きそして慌てた。

「フーン、保証人を捜さんと、車を挽くのか。なぜ先に当ってみなかった。」

「ほんとに保証人は捜せないのです。仕方ありません。」

「何！ 何！ 保証人が捜せないって！」 彼はひどく不思議そうに、眼を大きく見開いた。きっと、頭の中では私を悪人だとでも想像したのだろうか。彼は顔を真赤にし、咳払いを二つ三つして、「行け！ 行け！」と急いで手を振り、そっぽを向いてしまった。

私は少し腹を立てて外へ出た。戸外は初秋の午前の陽光が私の疲れ切った顔を照らしていた。紺一色、雲一つない空の下で、街の物音が騒然と伝わって来たが、何とも言えぬ寂寥感が私の心の中には立籠めていた。ポケットに手を伸ばして入れると、昨日残こした銅貨七枚の財産は依然として健在だったので、先程、鼻詰りの声が私に与えた悲しみは少しは薄らいだ。ただ石炭を継ぎ足しさえすれば、私というこの機関車は一日中走るのを恐れはしないのだ。あれこれやっておれば百のうちの一つぐらいは壁にぶつかるものさと私は意気銷沈しないそんな心を抱いていた。

目当もなしに通りをでたらめに歩いているようだが、私の眼はそれとなく仕事にありつける場所を捜していた。その時私はあれこれ選り好みをしなくなっていた。身を置く場所があり、食べる飯がありさえすれば、どんな仕事でも、賃金の有無に拘らず、何でもしなければならないのだ。

元来、私は成都で勉強しようとしても、学校へは続けて進学するすべがなかったので、中国の大都市を放浪する計画を立てたのである。一番好いのは、毎日の余暇に本が読めるような仕事が見付かることであつた。今や、それは水泡に帰したばかりか、牛馬となり変るような仕事さえも見付けられなかった。しかし、そのために私が氣力を失なうことは決してなかった。ただ、世間を渡る

にはどうしても奮闘しなければならぬのだということが、今では私の一つ一つの記憶を司る神経の線上に深く刻みこまれたのであった。

城隍廟のある通りまで来ると、昔、成都に居た頃の癖で、新書を買っている書店へ行き、書棚の新書をめくり、半時間ほど時を過ごしたかった。しかし、その時、私は我ながら少し羞かしく感じた。なぜなら、書物を買う資力があり、書店で自由に書物をめくる良き時代は私からすでに全く過ぎ去っていたからである。今や、私がさっと書店に入ろうものなら、私の手、私の足はきっと多くの人々の眼に監視され、憎悪されるのだ。

通りをゆっくりぶらついていると、「通俗閲報社」の求人広告が市場の樓上にかかっているのをふと見付けた。休憩のために中に入るつもりだったが、同時に頭脳に食糧を少し与えたいと思うと、汚れた古着にそれと分かる身分のことは全く気にしなくなっていた。

閲覧室は通りに面した小さな建物の一角に造られていたが、中には一人もいず、看守も外出しているようで、机上には雑誌や本や新聞が置いてあるだけであつた。窓からは陽光が一筋二筋さしこみ、部屋中が微笑を浮かべていた。この安らいだ気持ちのよい小天地は正に私の気持にぴったりで、正に私の彷徨の心を託することができた。私がこの閲覧室の看守であつたら、どんなに良いことであろうか。毎日の決まった仕事は大部分が床掃き、机・椅子の掃除、雑誌の整理、新聞の新旧を取換えてきちんと挟みかえることであろう。そんなことは私は手落ちなく整然とやれるし、しかも閲覧者の称讃をも得るのである。余暇には一人の閲覧者のように私に本を自由に読めるようにしてくれる。給金はなくてもよい。仮りにも二円の小遣銭があれば更に良いのだが。新しい雑誌を手にして表紙を眺め、題名を見ても、その内容は全く気にかけずに、指先が頁をめくっていれば、心はただかりそめの安らいだ甘い夢を幻想しているのである。

それから又、新聞をめくって見ていると、華安機器工場が見習工の募集をしている大活字の広告が私の眼の中に跳びこんで来た。その所在地は南門外の商業地区の中にあるというのだ。そこは滇越鉄道の終点であつた。見習工の当座の待遇や将来は職人になるという特典が人の心をそるようになれこれと説明してあつた。詳しい応募規程は工場の事務所へ取りに行くことになっていた。それには利点がもっと詳しく説明されているように思われた。これこそ生きる一つのチャンスであつたので、私は通りや工場の名をしっかりと覚えこんで出かけた。

市場から南門外の商業地区まで二三華里に過ぎなかったが、土地不案内のせいで、老人や子どもに尋ねたりして、幾度も無駄足を踏んだ。機器工場の屋根の下に着いた頃には、秋の日射しの下の私の影はもう小さな塊になって、私の足許に蹲まっていた。工場は仕事が終わったばかりで、黒い煙突の下のトタン屋根の頂きには、汽笛を鳴らした後の白い水蒸気がまだうっすらと残っていた。工場の門前に見習工募集要項が一枚貼り出してあった。私は立止まって見たが、中に入って一部を貰うまでもなかった。それにはこう書いてあった。見習工として工場に入れば、食事・宿舎は工場が負担すると。当然、それは私を非常に満足させた。しかし、三年間でやっと年期があけるとというのが私を少々当惑させた。だが、気が変わればそれとて大したことはない。三四ヶ月か一年半で「鞍替え」をしよう。別の規程に年期があけたら工場のために仕事をせよとあった。それは気にするまでもない。見習い半ばで、私は遥が遠くへ逃げ出してしまおう。条件をつけて私を拘束しようとしても、貴様らから搾取されるままになってたまるか。それは夢だ。読みながら視線をずらして見ると、工場の入口の内側にある二つの机を囲んで、人がいたが、彼らは大部分が技師であろう、丁度、酒を飲み食事をしていて、大変、楽しそうに見えた。話し声と容貌は全くの安南人で、彼らの酒を飲む風習は中国人と非常に違っていた。大きな碗になみなみとついだ酒を料理を盛る丼に入れ、一座の人たちはスープ用の匙で掬って飲む風変りな飲み方であった。その時、私の食欲は勿論激しく揺り動かされた。私は思った。見習工になったら、きっと腹一杯食べてやろうと。しかし、今は口一杯になる生唾をやっとの思いで嚙み下すだけであった。引続き注意して壁を見ていくと、別の要項にこう書いてあった。確実な保証人が必要だと。「大変、大変」私は小声で何回もそう言った。それはまあよいとしよう。続いて三十両銀の保証金が必要だとあった。全くガックリとなった。なぜ広告にはっきり書いてなかったのだ。時間を空費し、汗だらけになって、こんな目に会うとは。工場主のあん畜生、俺をからかっている。「拳骨」を二つ構えて彼をガンとやっつけたかった。だが、目の前には汚れて硬い壁以外に殴りつけるものは全くなかった。一発ガンとやれば気が収まるはずの工場長は、今頃は多分、温かい布団から這い出て、別の美しいベットに横になって、阿片でも満足げに吸っているのだろうか。

腹の中は一杯に煮えかえり、又、希望のない場所へ当もなく歩いて行った。人間は少しでも疲れると、実に空腹を感じるものだ。銅貨二枚をはたいて一寸したものを買い求め、食べたのか食べなかったのか分からないようにして食べ

終わった後で、これら二つの小さな小さな挫折は案外油断できぬことだと思った。私の筋肉が塵埃の中で野犬に引張られたり、蟻にたかり食われたりすることがまだない限り、私は是が非でも頑張り奮闘して行かねばならないのだ。しかし、銅貨七枚という財産が五枚残っただけになり、かえって心配の種となった。どれほど樂觀しても、五枚の銅貨はやはり五枚の銅貨であって、増えも減りもしないのだ。

秋の午後の日射しの中を私は影を曳きながら休みもせずに通りを歩いていった。すると意外にも急場を救ってくれる場所に出遇ったのである。その場所の門口には職業紹介所という看板が掛けてあったので、私は委細かまわずにさっさと入って行った。その時、私の胸中には臨機応変の下準備ができていたのだ。

中老の職員が一人、仔猫のように居眠りをしていたが、私の足音に目を醒まし、眼をこすりながら、もの憂そうに私の質問を聴いてくれた。

最後に私は言った。「筆記、帳面づけができます。使い走り、水汲み、掃除もみな厭いません。ほんとです。先生、私は何でもできます。」

彼は満足し、気に入ったように欠伸をし、眉間に皺を寄せて私を視つめ、一冊の厚い帳簿を取出し、唇に指を二本伸ばして湿らせてから、一頁一頁めくり始めた。ある頁で、急に靈感に打たれたかのように、私を射るような眼で視て尋ねた。

「君、コックがやれるかね。」

「出来ます。出来ます。」私は二つ返事で引受けた。雲南東部の山のあの一帯の「旅籠」は実に変っていて、米は売るがご飯は売らないので、旅人は歩き疲れたままで、自分で飯を焚き、副食を作らねばならなかった。だから、私は料理の腕は大体少しは持っていたが、特に熟練していたわけではなく、しかも手先が不器用であった。その時、大胆にかつ軽率に引受けたのは、全く身を切るような飢えに迫られていたからだ。彼は何も言わなくなって、例のように私の氏名、年齢を尋ね、保証人まで当然尋ねたが、ちゃんと準備をしていたので、私はすらすらと口から出た。「南門外広馬街の徳盛隆号が保証します。」

「主人の名は何というのかね。」彼は追及の手を弛めずに尋ねた。

「姓は張、名は鴻発です。」私は非常にうまく答えたので、我ながら笑いを我慢できなかった。書きこみが終り、彼は字が印刷してある細長い紙片をさっと撮み出して私に手渡してから言った。「ここに保証人の印鑑を押してもらったら、それでいいんだ。」

私は手に受取って、何日から仕事に出るのかと尋ねた。

「つまり、できるかのかな。」彼は指二本を伸ばし、薄くなった頭髪を痒いところでも搔くようにして搔いたが、それは考えをまとめるためだったのかも知れない。「君、行かなかつたら、人の顔をつぶすことになるんだ。紹介した人も気まずい思いをするんだよ。」

「大丈夫です。できなければ、承知するものですか。」私の態度はきっぱりしていたが、内心では慌てざるを得なかった。

「これは羅家のお邸からの求人なんだ。」彼は射すような眼光で私に言った。「給金は多い。鶏や家鴨のいろんな料理ができさえすればな。それに、あのお邸の旦那様や奥様は燕の巢や鱧の鱗がお好きだから、それも作らねばならん。そんな料理を君ら腕の利いた人は気楽に興にまかせて作るんだな。だが、わたしは心配だね。君は若いし、いろんな料理法は経験不足で、作ってもまずい味にならないかね。」また、指をピンと伸ばし、頭髪をしばらくガリガリと搔いて、ゆっくり言った。「まだ厄介なことがあるんだ。何人ものコックが行っても、二三日でみんな辞めてしまう。羅家の旦那・奥様・若旦那・若奥様、この方々は夜に阿片を吸い、深夜の二時三時になるまで吸い、君を起こして「小夜食」を作らせては夜を過ごすのだ。君、真面目に勤めればよいのさ。給金に不足はないはずだ。」

「旦那や奥様に仕えるのに、深夜の二時になんて起きられませんよ。お断わりします。」私は腹が立ったが、同時に滑稽にも思い、胸中の鬱憤を晴らしてやろうと口から出まかせに「ホラ」を吹いた。「以前、多くのお邸で働いたことがあります。鶏や家鴨の料理は何度もしたことがあります。「鱧の鱗」や「燕の巢」の料理は私の得意芸ですよ。でも、深夜に起きて奥様や旦那に仕えるなんて、これまでしたことはありません。」

「ア、そんなら駄目だな。」初めのうちこそ彼は冷やかに質問していたが、今や私の頑固な態度のせいで、遂に窮地に追いこまれていた。「金持ちにはな、君、よくお任せせねば。いい目にも遇うというもんだ。そんな利腕を持ちながら、職にありつけぬのも当然だ。全く君の心掛けが悪いからさ。君、わたしの言うことを聴きなさいよ。」

「いや、仕方ありませんよ。私はもともと金持ちにうまく仕えることができないんです。おじさん、仕事を別に捜して下さい。」

「君がコックに行かんのなら、外の仕事は無いよ。君は分からんだろうが、若者は、今の田舎の者はみな街に押しかけて来る。まるで、街の通りは何処でも宝を捨いあげられるかのようにね。毎日、幾人かが来るが、午前中は忙し

くてたまらん。申込みしても仕事待ちの者が多いんだよ。」彼はそこまで言うのと、思い入れよろしく嘆息して言った。「街には人がするのを待ってるような仕事はどこにも転がってはいないのだ。あ、——」

「すみませんでした。お邪魔して。」私は失望し歩いて外へ出た。戸外は日暮れ近くの秋風が街路の埃りを捲きあげ、人の眉のあたりをたたくので、私はいっそう不愉快になった。その時には怒りを感じざるを得なかった。一日中の荒波、失望、そして飢餓のためである。いくつか立続けに卑猥な言葉を口にして罵ってから、馬鹿者に押印させるために手にしていた紙片をチリチリに引裂くと、街の秋風の中を花びらのように、一枚一枚吹かれて、当もなく飛び散って行った。

秋風の中をゆっくりと歩きながら、深刻に切実に感じた。こんな世の中はどうあろうとも、自由な身になれるようにぜひしなければならぬのだと感じたのである。

3. 草鞋がまた盗まれる。

故郷から二三千華里も離れた見知らぬ都市で、私は人類から放棄された「塵」のようであった。一日中、飢餓を友とし、あちらの通り、こちらの露地と寂しげに歩きまわった。私の心中には悲しみもなく、眼中には涙もなかった。骨髄の中、血管の中そして細胞の中にそれぞれ原始的で単純な願いが燃えていた。つまり、自分は生きながらえて行きたいと。たとえ飢餓で頭がぼやけ、全身に盗汗が出る瞬間が時にはあるとしても、真暗い眼前に自己の生命が恍惚として隙間見えたのであった。それはまるで、軒端の軟弱な一本の蜘蛛の糸が日没近くの秋風に、今にも吹き断たれようとしているかのようであった。私は強烈にこう思った。少なくとも明日まで持ち耐えられたら、鮮かな太陽や晴れわたった秋空が見られるのだと。

仕事は見付からなかったし、食べ物に口に入れることができず、ただ飢餓が自分の筋肉を侵蝕し、飢餓が自分の血液を吸収するだけであった。だがそれでも結局は、生命をある時期までは維持できるのだ。それにしても、当面最も辛く、早急に解決すべき問題は、夜間、秋風と夜露とを避ける場所のことであった。朝に宿舎を出て、夜になってから帰って行くと、主人の不機嫌な顔が見え、ボーイたちの嫌味たらたらな嘲りの言葉には、我慢して厚顔ましくできたが、心の中では怨みつらみがあった。夜、あの「カサ」の出来た同宿のために、寝

つかれない時には、頭の中にとりとめもない幻想が次々に浮かんで来た。千年も昔に、店の主人にいじめられた秦叔宝が黄驃馬を引張って、街で競売したという悲しい昔話さえも非常に羨ましかった。馬一頭が売れたら、どんなにか良からうに、例えば、誰かが隣室で胡琴を弾きながら、楽しい小曲を唱い、私もつられてうっとりとして小声で唱い始めるように。「おやじどん 喧ましよう言うな馬鹿にするな。お待ちなされ。わしが黄驃馬を曳き出すのを……」しかし、唱えばそれだけ、自分の虚しさを感じ、心は深い悲しみに人知れず襲われ、取囲まれて苦しむはずである。

宿屋に泊って五日目の夜、前のよりも暗くて汚ない部屋にボーイから引張られて行き、別の見知らぬ同宿に紹介されたので、私は我慢し切れずに、あの夜、一緒に寝たあの同宿のことを尋ねてみた。なぜなら、彼の体一面の爛れた蟻のような疥癬は嫌いであったが、彼の善良で礼儀正しい態度が忘れられなかったからである。

「宿賃がなかったから、さっさと追い出したさ。」ボーイは素気ない声でそう乱暴に答えたが、脅しと嘲りとが隠された口吻であった。

私は慄然となった。どんな言葉も口から出さず、ただこんなに思った。あの男に同情しているのか、それとも自分自身に同情しているのか。私には分かっている。間もなく私も街頭に追い出されるのだと。私は体の向きを変え、小窓の外の真黒な夜——広漠とした冷酷な昆明の闇夜を眺めていた。

この新顔の同宿は、ベッドに寝ていて、顔は壁に向け、半分ずつ明暗に分かれた燈火の下にいたので、看てもどんな人物であるか分からなかった。しかし、私の胸の中にはとっくにこのような公式が画かれていた。「同じく天涯に落魄した人だから、一緒に寝るのに、見知らぬ人であってもかまわない。」と。詳しく観察したり、尋問するまでもなかった。私はただ無言で窓辺に立って、広々とした暗黒の中に小さな星が燦めいている秋の空を眺め、宿の主人から街頭に追い出されたあの前の同宿のことを思い出していた。今夜は何処に蹲まっているのか分からないが、眼に涙を浮かべて、体の痒くなった疥癬を苦しそうに掻いているだろうと。彼の育ちは知らないが、私はただ彼が夜にボリボリやりながら、立腹してこう言ったのが聞えただけである。「故郷じあ暮せねえで、省城に出て来たが、チェツ省城でも暮せねえだ。」この言葉だけを私は憶えていたが、落魄した人を説明するにはそれで充分である。だから、私は追及して尋ねもしなかったし、他人の育ちを追及するような物好きな気持は持合せなかった。しかし、その時、追い出された彼のことを思って、私は悲しみに胸一杯になっ

ていた。夕陽の中に焼け落ちた無数の廃屋、夕暮れに一筋の炊煙だになく、空に乱舞する鴉の鳴き声、その鴉もちりぢりに遠く飛び去る……そんな荒涼とした彼の故郷が私にはまるで見えなかったかのようであった。

「兄貴、燈を消して寝ては。」ベッドに寝ていたその男は、私がじっと黙りこんで立っているの、痺れを切らしてそう言った。その一声で私の胸裡の幻影は消えてしまった。ところが、彼の語気が非常に温和で親しみがこもっているように感じたので、私は無心に彼へ向かって言った。

「あなたも仕事捜しに省城に来たのですか。」

「いや、わしは明日、ほかの村へ行く。」私のこの質問に、彼はそんなぶっきらぼうな言い方でその場をつくろった。私が燈火を消し、ベッドにあがって寝るのを待って、彼はしんみりと嘆息して一言、言った。「こんな時勢に、やれることって何かあるかい。」

慰めの言葉など彼には役立たないのだ。また私も慰めの言葉を口に出すことができなかった。そこで、二人は静かに横になり、声も出そうとしなかった。秋の夜の闇が私たちを深々と埋めてしまった。

汗や足の悪臭がたえず私の鼻にツンと来た。普段なら嘔吐を催すものであったが、その夜は別に嫌いとも憎いとも思わなかった。足から悪臭を放つこの主人公は苦しい人生の荒波や痛々しい労働、そして悲しい失望を胸に懐いているのだということが、私には痛いほど身を以て理解されたのである。

翌朝、目を醒ますと、九時ごろだったと思うが、昨夜一緒に寝た同宿と私の古草鞋とが何処にも見当らなかった。履く草鞋がなくて、私は全く困惑した。しかし、草鞋を盗んだ人に対して、私は別にどんな恨みも呪いも持たなかった。なぜなら、今にも破れそうな草鞋をさえ盗むというその人の可哀そうな境遇に同情せざるを得なかったからだ。それにしても、何も載っていない踏板を看していると、遂には腹が立ち、カッとなった。私はプンプンして帳場に行き、断固たる態度で、怒鳴り声を発し、主人と口喧嘩を始めた。四五日来、彼が私に与えた鬱憤をすべて彼へお返しした。彼の弁解は相手にせず、彼の家の中で紛失した品物は主人たる彼が当然先ずその責任をとるべきだと思った。それで、口論に口論を重ねてやめなかった。

主人は結局、妥協して私に中古の草鞋一足を弁償した。草鞋の表は黒いサージの布地で作ったもので、やはり私の古い布製の草鞋よりも非常に綺麗であった。草鞋を盗んだ「友人」が損にならない商いを私のためにしてくれたのだとすぐにそう感じた。しかし、主人は私に草鞋を手渡す前に、怒声で注意した。

罵ったと言った方がよいであろう。なぜなら、彼の眼はカット見開かれ、今にも火花が炸裂しそうな見幕であったから。彼は言った。「君だけは今夜勘定して、さもないと……」立腹のあまり声も出せないでいた。

「いいですよ。」私は元気よく答えたが、内心は口喧嘩が少し乱暴すぎたと後悔した。だが、早晩、宿を追い出されるわけだし、彼を非難できるチャンスを掴んだこの際、遠慮や妥協など不必要だと思った。

弁償された綺麗な草鞋は実に意外な収穫であった。ところが足に合わせてみると、この草鞋めは足より少し短かいことが分かったのである。勝ったと思いこんでいたのが、どうやら敗北であった。別に思案もないので、この寸足らずを無理して足に履いたのであった。その結果、この山国の都市には草鞋に引きずられて流浪する青年がまたもや空しく増えたのだ。それに、私が街頭を歩く様子は更に慌わて、更に滑稽でもあった。しかし、私はそんな事を全く気にするわけにはいかなかった。ただ私は宿屋を出ながら、その夜は何処か秋風や秋の雨を防ぐ場所を捜さねばと胸算用していたのである。

同時にその時、私は思ったのだ。たとえこの社会が私に足の置き場も与えなくとも、私は鋼鉄のように強く生きて行こうと。

1931年冬、上海。

1981年4月于崎陽樟東書屋記、6月附記王沙之信、
7月附記艾蕪先生之回答。

(昭和56年4月10日受理)